



上越市^{どうこ}堂古遺跡現地説明会資料

平成 26 年 9 月 6 日 (土)

国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

堂古遺跡は国道 253 号上越三和道路事業に伴い、今年 4 月から発掘調査を実施しています。遺跡の範囲は東西約 150m で、調査面積は 6,800 m² です。遺跡は、高田平野のほぼ中央、米岡集落の北側に位置し、飯田川左岸に形成された標高約 14.5m の自然堤防上に立地します。調査では、古墳時代から中世までの遺物が出土しましたが、主体は室町時代 (14~15 世紀) で掘立柱建物、井戸などが見付きり集落が営まれていたことが明らかになりました。



上越三和道路予定路線と調査遺跡の位置



遺跡土層断面

土層は、近世以降の開発による削平などから、中世以前の遺物包含層は残っていません。また、昭和 50 年代頃まで広く畑地として耕作されていて畝跡が多く残っています。

中世の遺構は表土を掘り下げると見つかります。

井戸はここまで25基近く見つっています。大きさは、上端径が1.5m前後になるものと80cm前後に満たないもの2形態ありますが、全て素掘りで深さは2mを超えます。井戸は版築のように土を層状につき固めて埋められています。埋土から稀に珠洲焼などの遺物が出土した井戸もありましたが、出土遺物のない井戸がほとんどでした。



井戸の土層断面



素掘りの井戸

遺跡西側で検出した南東-北西方向に走向する溝（SD510）は、上端幅が約3m、深さが約1.3mの大溝です。集落の境をなしていた可能性があります。



大溝(SD510)



大溝の土層断面

出土した遺物

土器は、古代の土師器・須恵器、中世の土師質土器、珠洲焼、青磁、白磁などが出土しています。主体は珠洲焼で、12世紀後半から15世紀末にかけて能登半島で生産され流通したものです。石製品では砥石、硯、金属製品では^{とうす}刀子、鎌などが出土しています。



珠洲焼



青磁・白磁



硯



砥石

まとめ

溝で区割した中に建物、井戸を配した室町時代（14～15世紀）の集落の姿が明らかになりました。隣接する下割遺跡の成果と共に広く当時の景観が復元できると思われれます。

検出した遺構

掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構などが見つかって室町時代の集落の様子が明らかになりました。掘立柱建物は現在まで9棟確認しました。柱は直径40cm、深さ60cm前後の穴を掘り、柱を立て周囲に埋め土していました。穴底面の柱が当たっていた所は変色しています。



掘立柱建物



柱穴

8・9H区付近では多数の柱穴や井戸、径3m、深さ2mの大型土坑、納屋か工房跡といわれる竪穴状遺構などが集中し、集落内の中心的屋敷跡ではないかと考えています。



大型土坑



竪穴状遺構

屋敷地の南西側には小さな焼けた骨片を伴う ST684 が検出され、火葬が行われた跡と考えられます。また、西側には長径1.5m前後の長方形の土坑が点在し、人骨や副葬品などはみつかっていないものの形状から墓の可能性が高く、墓域になっていたようです。



火葬跡 (ST684)



長方形の土坑